八尾徳洲会総合病院

「緩和ケアの基本」を学ぶ

医師ら27人が研修会に参加し意見交換

八尾徳洲会総合病院（大阪府）は院内で今年度の緩和ケア研修会を行った。同院をはじめ関西・大阪ブロックの徳洲会グループ病院から医師を中心に緩和ケアに携わる医療従事者 27 人が参加。今回は研修医など若手医師が多く、座学やロールプレイ、グループワークなどを通じて活発に意見交換しながら緩和ケアの基本を学んだ。研修内容は「日本緩和医療学会 PEACE プロジェクト」に準拠。

PEACE プロジェクトは国の方針に基づき、日本緩和医療学会が日本サイコオンコロジー学会の協力を得て開発した主に医師を対象とする緩和ケアの継続教育プログラム。がん医療に携わるすべての医師を対象とし、緩和ケアの基本的な知識・技術・態度を学ぶ「緩和ケア研修会」と、緩和ケア領域で一定の経験をもつ医師を対象とし、成人に対する教育法や指導法を学ぶ「指導者研修会」を設けている。

このうち「緩和ケア研修会」は、e ラーニングと集合研修で構成、e ラーニングを修了したうえで、2 年以内にがん診療連携拠点病院などで開催される集合研修を修了しなければ、「緩和ケア研修会修了者」と認められない。

e ラーニングは緩和ケア概論、全人的苦痛と包括的アセスメント、がん疼痛、呼吸困難、せん妄、コミュニケーション、療養場所の選択と地域連携、ACP（人生会議）、看取りのケア、家族・遺族ケア、がん以外の疾患に対する緩和ケア、その他の身体的苦痛に対する緩和ケア、不眠、緩和的放射線治療・神経ブロック・IVR（画像下治療）による症状緩和、社会的苦痛に対する緩和ケアなどをテーマとし、学習時間の目安は合計 8 時間超に上る（医師以外の医療従事者は一部免除）。

集合研修は、これらのうちのコミュニケーションや療養場所の選択と地域連携などをグループワークやロールプレイを通じて、さらに学ぶ。

八尾病院は大阪府がん診療拠点病院として「緩和ケア研修会」を 2014 年からコロナ禍を除き毎年開催。「学べる貴重な場」として、院内はもちろんグループ内外から参加者が集まっている。

今回は、同院以外に野崎徳洲会病院（大阪府）、吹田徳洲会病院（同）、生駒市立病院（奈良県）の職員が参加。医師だけでなく、看護師や医療ソーシャルワーカーの姿も見受けられた。

受講者は事前学習の e ラーニングを修了し、集合研修の会場である八尾病院に来院。はじめに研修会主催者として同院の原田博雅院長が挨拶し、あらためて研修会の意義などを伝えた。続いて今回の研修企画責任者でもある片上徹也・精神科医長が集合研修の概要を説明し、プログラムがスタート。池下和敏・麻酔科部長が講師を務め、e ラーニングの復習を行った。



集合研修で挨拶をする原田院長


企画責任者の大役を果たす片上医長


若手が多く参加し積極的に議論、会場は活気ある雰囲気に


グループワークで話し合った内容を画面に表示し共有

その後、休憩をはさみながらロールプレイやグループワークを実施。各グループにファシリテーターが付くなか、「コミュニケーション」では受講者が医師・患者さん・観察者役を交互に務め、オピオイド鎮痛薬を開始する際の説明や治療が困難ながんを告知する場面を演じたりした。「療養場所の選択と地域連携」ではグループ内で在宅移行への進め方などを話し合い、地域連携や患者さんや家族の思いに寄り添うポイントなどを学んだ。各グループが話し合った内容を発表し合い、受講者が共有する時間も設けた。

集合研修は約 6 時間で終了。今回の受講生 27 人全員が無事に修了した。参加した八尾病院の藤本航輝研修医（2 年次）は「緩和ケアは答えがひとつではないと思うので、グループワークなどを通じて他の方の考えを聞けたのが良かったです」と顧みた。印象的なプログラムには「コミュニケーション」を挙げ、「患者役を演じて、がんの患者さんでなくても、日々の患者さんとの会話で“もう少し間の使い方に気を付けたほうが良いかな？”など気付きが得られました」と振り返った。

片上医長も「私自身も今回、あらためてロールプレイの重要性を実感しました。ふだんは医療者として診療する立場ですが、患者役になることで、“どの言葉に安心し、どの説明で不安になるのか”を、身をもって感じることができます」と納得していた。

命救う医療に心に寄り添う優しさ「全人的医療」も大切にする病院

緩和ケア研修会について片上医長は、「がん診療に携わる医師が、症状緩和や患者・家族とのコミュニケーションなどを実践的に学ぶ重要な研修」と強調。「がんや難病の告知、余命についての説明など、患者さんの人生を大きく左右する場面では、言葉の選び方や間の取り方ひとつで安心感が大きく変わります。今回の研修では、患者役を経験することで、伝え方の大切さをあらためて実感してもらえたと思います。救急医療や高度急性期医療に力を注ぐとともに、患者さん一人ひとりの不安や苦痛にも寄り添える、心の通った優しい医療を提供できる病院でありたいと思います」と続けた。

長年にわたって同研修会の開催に携わり、今回もファシリテーターとして参加した髙原良典・総合診療部長（研修委員長）は「今回は若い受講者が多かった一方、当院副院長の薦岡成年先生（心臓血管センター長兼務）など経験豊富な方もおられました。心臓血管外科は、あまりがんを扱いませんが、ご自身の診療経験で受講してください ました。会の進行もスムーズで良かったです」と笑顔。

また、研修会の継続に向け、世代交代が進んでいる点も指摘。「受講者を導く側はもち回りで務めていますが、今後も続けていくためには、新しい方に加わってもらい、もう少し広げたほうが良いと思い、片上先生などに昨年資格を取得してもらい、今回、中心的にかかわってもらいました。精神科で指導担当者は当院初です」と説明し、「大阪府の場合、緩和ケア研修会の開催が研修医の募集定員にかかわってくることがあるので、できるだけ開催を維持できるようにしたいと考えています」とも加えた。

同院は来年度も引き続き開催していく方針。片上医長は「今回このような貴重な役割を任せていただき、多くの先生方やスタッフに支えていただきながら運営できたことは、私自身にとっても大きな学びでした。多職種が協力し合う徳洲会らしいチーム医療を実感する一日となりました」と関係者に謝意を表し、「今後も患者さん一人ひとりの苦痛や思いに寄り添える医療を実践するとともに、研修会を通じて実践できる人材育成につながれば」と期待を寄せた。

吹田病院

第1回地域連携学術講演会 新体制を地域の医師に紹介


刷新した吹田病院の診療体制を確認する大阪府医師会メンバー

吹田徳洲会病院（大阪府）は8月22日、大阪市内で第1回地域医療連携学術講演会・情報交換会を開催した。同会は大阪府医師会の生涯教育システム単位取得講座でもあり、地域の医師50人が参加。

冒頭、北田文則院長が登壇し、1月から3代目院長に就任した挨拶に加え、4月から救急科、呼吸器内科、整形外科に医師が入職し、院内の診療体制を刷新したことを伝えた。同会では、新たに入職した医師が、それぞれの診療内容・専門領域を紹介した。

八木啓一・院長補佐兼救急センター長は自己紹介した後、現代では検査に頼りがちであるものの、問診こそが診断に至る重要なポイントであることを指摘した。

岡田あすか呼吸器内科部長は、肺がんの診断に重要な遺伝子検査やPD-L1（免疫チェックポイント）検査が自院で可能となり、同院で診断から治療まで肺がん診療のすべてに対応できることを強調した。

整形外科からは、和田英路副院長、西川昌孝・主任部長、蒲生和重・部長兼手外科・肘関節センター長が講演。和田副院長は脊椎疾患とその治療法を解説、また救急搬送患者さんの多くが高齢者であり、救急医療とは高齢者医療でもあることを指摘、来院が難しい患者さんについては、かかりつけ診療所まで迎えに行く構想もあることを明かした。

西川・主任部長は変形性膝関節症の治療について言及。同疾患の患者さんのボリュームゾーンは70～80代と高齢化しており、そのぶん治療の難易度も高いことから、人工膝関節置換術は西川・主任部長ももつ人工膝関節専門医の資格を取得している医師に任せてほしいと訴えた。

蒲生部長は手やひじの各疾患の治療法を解説、関節リウマチなどメジャーな疾患だけでなく、ヘバーデン結節など希少疾患の治療も実施していることを伝えた。最後に和田副院長が『北摂スポーツセンター』構想を披露。

学術集会後は交流会を開催、吹田病院各部署のスタッフが自部署の特徴などを地域の医師に紹介した。

吹田病院がキッズフェスタ

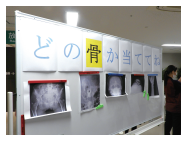
「ミャクミャク」など登場で大にぎわい

吹田徳洲会病院（大阪府）と院内に併設する介護老人保健施設（老健）吹田徳洲苑は、キッズフェスタを開催した。地域の子どもを対象にしたイベントで昨年に続き2回目。今回も医師や看護師、コメディカルら、ほとんどの部署が参加し、それぞれブースを構えて体験コーナーなどを企画した。とくに手術支援ロボット「ダヴィンチ」やAED（自動体外式除細動器）の体験コーナーが人気だった。


オープニングで挨拶する（左から）北田院長、西野・看護部長、「すいたん」

また、今年は目玉企画のひとつに、マスコットキャラクターを活用。昨年の大阪・関西万博公式キャラクター「ミャクミャク」と、地元・吹田市のイメージキャラクター「すいたん」が午前と午後に会場に現れ、撮影会など行った。登場する時間帯は明かされていなかったため、朝から多くの親子が駆け付けるとともに、両キャラクターが姿を見せると、会場は一層にぎわった。北田文則院長と西野万寿子・看護部長も映画のキャラクターに扮し、会場を盛り上げる場面もあった。

天候にも恵まれたこともあり、約1,500人が参加。隣接する茨木市から訪れた方は「病院のイベントに参加するのは初めて。子どもも楽しんでいて、勉強にもなる良いイベントだと思います」と満足げだった。中心的に準備を進めた並河俊弘・老健吹田徳洲苑事務長は「スタッフも楽しんでいる様子がうかがえるので、今年も開催して良かったと思います。来年も多くの方に集まってもらえるよう、頑張ります」。

放射線診断科のブース。3Dプリンターで人体の骨を再現しクイズで学ぶ